

脳都物語 屁尻

大村伸一

★

煉岡融解は、その日、出社するとすぐに上司から脳都への転勤を命じられた。午後一番の船で出発するよにというのだ。準備が必要だから二三日時間がほしいと抵抗したが、上司はとりあわなかった。

「急な仕事だから、すぐに行ってほしいんだ。必要なものは向うで揃えればいい」
手渡されたカードの限度額ならば、脳都でもかなりいい部屋で生活ができるだろう。

★

「緊急の仕事で午後出発することになったんだ」
「今度はどこなの」
「君の故郷だよ」
「」
「君と舞にも一緒に来て欲しいんだけど」
「それはできないわ」
「結婚してから一度も実家に帰ってないだろう」
「帰りたくないもの」
「どうしてなのか、聞いてもいいかな」
「南回りの船よね」
「ええと。いや、北回りだよ」
「北回りだったら、いつ脳都に着くのかわからないじゃない」
「でも会社が手配してくれた切符なんだ」
「本当に緊急の仕事なのかしら」
「どういう意味だい」

「脳都は世界の中心って言われてるけど、それは相撲のことだけよ。夜、歩くときは、暗がりに近づいちゃだめ。わかった？」

船の出発のサイレンが鳴り響き、電話はそれ以上つながらなかった。サイレンは耳が痛くなるほどうるさかったので、つながっていても声は聞こえなかっただろう。二十人ほどの乗客を乗せ、フェリーボートはそれから二時間後に港を離れた。

★

「今日は、舞は泣かなかった？」と融解が聞いた。
「そうね。幼稚園のお迎えがきて泣いたわ」と梨絵は答えた。
「アルトと離れるのが嫌なの」そう続けた。
「いつまでも、ぬいぐるみと一緒にはいられない」融解が諭すように言うと、梨絵はしばらく何も言わなかった。
「君はどう」融解が聞いた。

小さな咳をして梨絵は、変わらないと言った。

「今日は何処なの」と梨絵は聞いた。

「まだ石湧港」

「車の方が早かったかもしれないわね」

「会社からチケット貰ってるからな」

「気をつけてね」

「わかった」

★

港には千を超える数の倉庫が並び、搬送車が倉庫と荷搬舟の間を何度も往復している。車は速度を落とすことなくお互いのすぐそばを走り抜けるが、ぶつかることもなければ停止して他の車が通り過ぎるのを待つ車さえなかった。搬送車の運んでいるのはどれも「脳都重工業」という大きな文字が特殊な字体でペイントされた専用のコンテナで、間隔を開けて並んだ荷搬舟に次々と詰め込まれていく。荷搬舟は港と、接岸できず港の中ほどに停泊しているどの船よりも二周りはおおきな貨物船との間を往復する。一度に五隻が荷揚げを行える。しかも、港で荷を積み込むよりも早く、貨物船に運び込まれていくので、港と貨物船の間で待っている荷搬舟は一隻もない。それでも荷揚げは夕方までかかり、仕事が終わると貨物船はゆっくりと向きを変えて港から出てゆく。

「さすが脳都ですね」

「初めて来たのかい」

「そうですよ。都会ははじめてです」

「ははん。そりゃ仕方がないな」

「何がですか」

「ここは脳都じゃないよ。脳都はもっとずっと先だ」

★

「家の苗字が嫌だったわ」

「そうだね。若い女の子には『屁尻』はいやかもしれないな」

「小学校ではいつも虐められたのよ」

「ひどい話だね」

「そんなの気にしていたわけではないわ。家は、昔から続くサムライの家系なの」

「え。初めて聞く話だ」

祖先に屁尻実時という武将がいて、戦が巧みで勇敢で、武器の扱いにも優れていて、兵を引く時はいつも殿を引き受けたのだという。追われる中、命をいく度も危険にさらしながら、敵の前面に大きな音で放屁し驚かせたのだという。豪胆を示し、味方にほとんど損害も出さずに退却できたことの褒美として、領土とともに姓「屁尻」を賜ったのだという。天下分け目の戦いであった獄ヶ原の戦いでも目覚しい働きをし、大大名となったが、その後、何百年と続く太平の世に、一族は辻斬りの屁尻として名を知られるようになる。十五代当主、屁尻蹴馬は夜になると城下に出て辻斬りを楽しんだと伝えられていて、それはおそらく事実だろう。そして、梨絵は小学校では、「辻斬り」とか「サイ子」と言われていじめられたのだった。

「苗字なんてどうでもよかったわ。辻斬りの家系に耐えられなかったの」

★

港を出てゆく貨物船と入れ違いで港に入ってきたフェリーに、練岡は乗っていた。フェリーの甲板上で、練岡はこれから入る港を見ていた。毎日新しい港に停泊し、翌朝日が昇る時刻に船は出航する。宿泊中は陸に上がってもいいし、船で休んでもいい。どちらでもお好きなようにと、客室係は言った。出航は旅客全員の乗船を確認してから行うので、安心して下さいとも言っていた。

毎日のことだが、船から眺めていると、どの港もまったく同じに見えた。同じ景色の港の奥には同じ看板を上げた市場があり、その向こうには古びたホテルが二軒ある。一軒は「大漁船」という名前に決まっていて、もう一軒はその土地土地で違ってはいたが、それでも「鮮」か「沖」か、まれに「潮」の文字を含む長くても四文字の名前だった。

船に泊まった乗客は食事のあとも食堂に残り、酒を飲みながらテレビを見ることになる。ときどき船長が現れ、客や船員に混じってビールを飲んでいる姿が見られる。船長と気づいて近づく客は多い。

「なぜ、夜も航海しないのか」

そう尋ねられても、船長は質問が聞こえなかったかのようにテレビの画面を見つめながらビールをすすめるだけだ。甲羅のように硬く黒く日焼けした顔にテレビの光が反射していた。

「今日は貨物船が夜の航海に出て行くのにすれ違いましたね」

「毎晩港に泊まっていたら、脳都にいつ着けるのかわからないよ」

「料金が半額以下といっても、いつまでも脳都につかないんじゃない」

船長はそういった苦情に、酔いがまわり気がむくと答える。

「夜の海は危険なんだよ。夜だけに発生する嵐は昼とは比較にならないほど凶暴で、こんな船など空よりも高い波に掬い上げられ、次の瞬間海水が消え、露わになった海底の岩に船が叩きつけられる。そんなふうには破壊された船を何隻も知っている。その話だけでもどれだけ恐ろしいことか想像できんのかね。それだけじゃない。そんな嵐など夜の海の恐ろしさの序盤にすぎないんだ。深夜ともなれば、幾年も海底に潜み空腹で心を満たした巨大生物（船長はそれを鯨とも巨大蛸とも言わなかったが、そのせいでかえって不気味に思えた）が人の血や尿の匂いを辿って船を下から襲うのだからな。船で最も頑丈だがその生物にとっては柔らかい腹のように脆弱な船底から。

でまかせだと思ってるんだろう。だったら、夕方出港した貨物船が目的地に到着したという知らせを誰か聞いたことがあるかね」

誰かが言った。

「夜間に航海した船が必ず行方不明になるなんてニュース、見たことがないぞ」

船長は馬鹿にしたような表情と口調で答えた。

「あまりにもありふれていて、ニュースになどならないからな」

船長がこの話をすると、それから数日の間は、誰も文句を言わなくなる。

朝、船客全員の乗船を確認してから船が出発すると言われてはいたが、練岡は船から降りることはなかった。

★

食堂のテレビでは、ほとんどの時間、脳吐相撲の取り組みを映している。一日中やっているはずはないのだし、他にも放送することはあるだろうが、船では脳吐相撲しか映さなかった。昼前から始まった取り組みにテレビの中の観客は大勢いたし、船の食堂でも相撲好きが一日中テレビの

近くに居座っていた。午後一番の取り組みを真面目に見ている者は少なかったが、牛叩は人気があったので、牛叩の取り組みになると決まってそこここで歓声があがった。

その日、牛叩の立会いで、行司が軍配をあげると決着は一瞬でつき、牛叩は土俵に倒れたまま立ち上がらなかった。大きな鉄板が持ち込まれ、牛叩をそれに乗せると、五人ほどの力士が運んでいった。

「こんなこともあるんですか」

練岡が隣にいた顔見知りになんか話しかけたが、テレビを見ていなかったその男は何も答えなかった。その後の解説でも何も言わなかったのによくあることなのだろう。牛叩の対戦相手の名前は結局聞き漏らしてしまったが、よほど強い力士なのだろう。

「あれは、きっと礼二よ」

「礼二って、君の弟だろう。お相撲さんになっていたっていうの」

「あの子の仕業だわ」

「そんなこと、どうして分かるんだ」

「うちは辻斬りの家系なの。あの子も辻斬りをせずには生きていけないの」

「どういう意味だい」

「辻斬りの奥義って何か知ってる？」

「え？ 辻斬りは、刀の切れ味を試すために」

「違うの。辻斬りは、誰にも自分が辻斬りだと悟られないようにすることが第一なの。知られたらもう二度と辻斬りができなくなってしまうものね」

「そう言われればそうかな」

「だから、辻斬りの奥義は、相手の心の中にある自分自身を切るということなのよ。相手の心の中の自分を切り、完全に消滅させれば、だれも辻斬りをしたのが誰なのか分からない」

練岡は、妻が何を話しているのかは理解できなかったが、結婚五年目にしてようやく妻が実家を嫌っていた理由がわかってきたような気がした。

★

「どうです。これが脳研塩ですよ」

確か名前を頭在蟻渦という船員が、周囲を見回してから練岡にポケットの中のものを見せた。それは茶色の封筒に入った茶色の粉末で、船員に勧められるまま、指につけて舐めてみると甘かった。顎がはずれそうなほど甘かった。

「塩っていったひょは」

甘さで舌が痺れたのか、最後は言葉にならない。船員は顔の輪郭を震わせ笑いながら応えた。

「脳研塩って知らないかね。それがこれ。栄養豊富で甘いだろ」

練岡の故郷でも「脳研塩」のパックは売っていたが、それは「塩」であり「調味料」であり決して甘くはなかった。驚いていると船員は続けた。

「脳吐相撲の土俵、知ってるよね。あの土俵の土から摂れる脳研塩のこともご存知ね。巷には偽物が出回ってるけど、これは本物。栄養満点で、これだけ食べてれば年も取らないっていうよ」

「そうだったのか」

舌の痺れもとれ、ようやくまともに話せるようになってきた。確かに、船旅で時間が早くなれるのであれば、歳を取らないようにするものがあったもおかしくはないだろう。そして、それがまさに脳研塩なのだろう。

「いるかな」

顕在はそういって、ポケットから小さいビニール袋を指でつまみだし、練岡の目の前にちらつかせた。練岡はそれを見るだけで舌が痺れてくるようだ。

「くむげ」

練岡は高額紙幣を顕在の手に押し付け、袋を奪い取った。支給された金があれば、脳研塩はいくらでも買えるだろう。船で行くように命じたのは会社なのだから、これは必要経費というものだ。

★

「舞の描いた絵が学校で賞をとったわよ」

「お。えらいな。ちょっと電話替わってよ。褒めてやらなきゃ」

「それは無理だわ」

「どうして」

「舞はお父さんのことが嫌いなの。出たくないって」

「何、馬鹿なことを言ってるんだ」

「馬鹿なことじゃないわ。もう思い出すのも嫌みたいよ。お父さんの話を始めると、泣くの」

「思い出したくないって、どうしてそんなに嫌われるんだ」

「八年も顔を見ていなかからかな」

「八年だって。そんなにたってるはずがない」

「あなた、そんなことも知らずに船に乗ったのね。脳都行きの船で航海すれば、陸よりも何倍もはやく時間が過ぎるのよ」

「そんなおとぎ話のようなことがあるものか。あ。学校って、もう小学校に行ってるというのか」

「中学よ。話さなかったかしら。だから船はよしてって言ったのに」

「冗談はやめてくれ。それが本当なら、誰が船で旅をするって言うんだ」

「ええと、脳都に行かなくてはならないけれど、本当は行きたくない人かな」

★

「どちらに行かれるんですか」

以前、何故夜に船を出さないのかと船長に食ってかかっていた丸顔の男が練岡に話しかけてきた。

「脳都です。この船の客はみんな、この船の目的地に行くのでしょうか」

そう答えると男は頬をふくらませそんなことがあるわけがないと主張した。

「船はたくさんの港に泊まるのですよ。どこか途中の港に行こうとここにいる者もないわけがないでしょう」

「最初はそう思っていたんですが、どこか途中の港で下船した人を見たことがないんですよ」

そう指摘すると男はさらに顔をふくらませいつのつた。

「すると君は途中の港で降りてはいけないというのか。どこで降りようと自由じゃないのか。船というのはそれほどのものなのか」

途方にくれていると、蟻渦客室案内係が近づいてきて喚き続ける男の腕をとり甲板に連れていってくれた。

「こういう客もいるものです」

後で戻ってきた客室係りは言い訳するようにそう話した。

★

「脳研塩を送ったよ」

「脳都塩ならここでも買えるわ」

「全然違うんだよ。君も知っている通り、脳研塩は老化を遅延させる」

「知らないわ」

「脳都では常識だよ」

「まだ脳都に着いてないんでしょう」

「脳都に行き来する船では、脳都の最新情報が得られるものだ」

「でも、そんな話聞いたことがないわ」

「たぶん、船の乗組み員が必要の中から生み出したものなのだろうと思っている」

「妙な話なのね」

「だが確かな話だ」

「船から送ったら、二、三年くらいかかるかな」

「そうね」

電話は唐突に切れた。

★

港には千を超える数の倉庫が並び、搬送車が倉庫と荷搬舟の間を何度も往復している。車は速度を落とすことなくお互いのすぐそばを走り抜けるが、ぶつかることもなければ停止して他の車が通り過ぎるのを待つ車さえなかった。搬送車の運んでいるのはどれも「脳都重工業」という大きな文字が特殊な字体でペイントされた専用のコンテナで、間隔を開けて並んだ荷搬舟に次々と詰め込まれていく。荷搬舟は港と、接岸できず港の中ほどに停泊しているどの船よりも二周りはおおきな貨物船との間を往復する。一度に五隻が荷揚げを行える。しかも、港で荷を積み込むよりも早く、貨物船に運び込まれていくので、港と貨物船の間で待っている荷搬舟は一隻もない。それでも荷揚げは夕方までかかり、仕事が終わると貨物船はゆっくりと向きを変えて港から出てゆく。

「さすが脳都ですね」

「初めて来たのかい」

「そうですよ。都会ははじめてです」

「ははん。そりゃ仕方がないな」

「何がですか」

「ここは脳都じゃないよ。脳都はもっとずっと先だ」